

2009 年度春学期 チューター業務を振り返って

所 属	社会学部	社会	学科
担当科目	社会統計学 1, 国際社会学, エリアスタディ概論		

<春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

* 社会統計学

授業に出席し受講生の質問を受ける他、小テストの採点やプリントの印刷をした。

授業では、先生には質問しづらい内容もチューターには質問しやすかったようだったので受講生の役に立てたと思う。

自給をもらって働くという責任感があったので、予習に時間をかけたり教え方を工夫した。

一度履修したもののうろ覚えになっている内容も理解できて自分のためにもなった。

* 国際社会学・エリアスタディ概論

業務は受講生から提出されたレポートのなかで他の生徒のものを転載していなかのチェックだった。

国際社会学とエリアスタディ概論の授業には出席していなかったため（授業には出席しなくてもよいということだったので）、国際社会学とエリアスタディ概論のほうは受講生との交流はなかった。業務に関しては、締め切りを大幅に遅れてしまったので、自覚が足りなかったと思う。

全般的には、まだチューターという仕事が確立しておらず、先生もチューターをどう使うか試行錯誤している状態だという印象を受けた。

チューターは院生の T A と違い、受講生と一緒に自分も理解を深めていく立場だと思うのだから、学生間ではこの制度が周知されていないようで、院生 T A と同じようなものだと考えている学生が多かった。

<今後のチューターまたは先生への提案>

チューターや先生への提案ではないが、チューターを募集する際に仕事内容を明記したほうが良いと思う。国際社会学とエリアスタディ概論の業務は予想とかなり違い、なかなかハードだったので…。

2009 年度春学期 チューター業務を振り返って

所 属	社会学部	社会	学科
担当科目	「社会統計学」 「教育社会学」		

<春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

私は「社会統計学」と「教育社会学」の2つの教科のチューターを行いました。「社会統計学」では、授業で使うプリントの印刷、配布、授業中教室を巡回しての質問対応などを主に行いました。昨年とった授業ではあるのですが、忘れていたところも多々あったため、授業中の質問に答えられるよう、事前に予習をして授業にのぞみました。その回で使用するプリントを、事前に先生がメールで送ってくださっていたので、役に立ち、ありがたかったです。授業中の質問は、最初は聞かれることが少なかったのですが、だんだん回を進めるごとに、質問をしてくれる子が増えてきました。統計学は聞いているだけでは分かりづらいと思います。実際に自分で問題を解いて理解をしていく中で、私たちに質問をしてくれて少しでも理解の手助けになったことが良かったと思います。穴埋め形式のプリントなども良かったと思います。授業後には、毎回少しの時間ではありますが、先生とその日の授業の分かりづらかたった点などを話しました。また、チューターリングシステムへも先生がコメントを下されたので、意思疎通がはかれ、より良くしていけたのではないかと思います。

「教育社会学」は授業中に出された問題用紙の回収や鍵の返却を行いました。「社会統計学」に比べ、行うことは少なかったです。この授業では質問などありませんでした。なので授業中は特に行うことがない状態でした。なかなかやることを見つけるのも難しかったです。先生と交流する機会も少なかったので、もう少し先生との話し合いなどを行い、何かできたら良かったと思います。

<今後のチューターまたは先生への提案>

チューターのシステムは、先生とチューター、自分以外のチューターの連携があって成り立つものだと思います。なので、まずは、先生とチューターがその授業についてしっかり話す場を設けたほうが良いと思いました。また、授業を生徒が積極的に参加していけるような参加型の授業にしていくと、チューターの役割も増え、生徒もより学習できると思います。

チューターも生徒なので、チューターが授業で分かりづらいところはその授業をとっている生徒も分かりづらいと思います。そのようなところを先生に伝えていくことも私たちチューターの役割だと思います。

2009 年度春学期 チューター業務を振り返って

所属	社会学部	社会	学科
担当科目	社会統計学		

<春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

私は2009年度春学期社会統計学 I のチューターとして、レジュメのコピー・配布をはじめ、学生からの質問対応や、小テストの採点などの業務を行いました。チューターという立場で授業に参加し気付いたことは、受講している学生のほとんどが統計に苦手意識を持っているということです。私自身、もともと数学は好きでしたが、受講していた当時は定理が何を意味しているのか、自分の解いている問題がどういった意味を持つものなのかさっぱりわかりませんでした。そのことを思い出し、学生に教える際には単に解き方を教えるだけではなく、定理の意味や問題を解く目的などを重点的にわかりやすく教えるよう心掛けました。

先生は少ない授業数のなか、難しい授業内容をいかに学生に理解してもらうか、ということに悩んでいらっしやいました。効率よく学生全員に教えるという点では私たちチューターの力はあまり及ばなかったように思い残念ですが、レジュメの例題を穴埋め方式にしてからは、学生の手を動かす機会が増え、チューターが教室を巡回して教える機会も増えたので、効果的だったと思います。

振り返ると、授業全体を通して、私は「学生の統計への苦手意識をなくす」ということに力を注いでいました。統計について理解できないまま授業に出なくなる学生が増えるのは残念だと考えたからです。問題が解けずに考え込んでいる学生に積極的に話しかけたり、小テストの答案に丁寧な解説を添えることで、苦手意識の改善に少しは繋がったのではないかと思います。たまに学生の方から質問を受けたときは嬉しかったです。

個人的には、「人に教える」ということに苦手意識を持っていたのですが、相手に伝えることや相手は何がわからないのか理解するという点で、チューターの経験が私生活でも役に立ちました。授業を創っていく手助けができたのもなかなか無い経験で、成長できたと思います。

<今後のチューターまたは先生への提案>

チューターは先生の補佐の仕事ですが、先生は、単なる補佐としてではなく授業に携わる一員として私たちを扱って下さいました。毎回の授業後、どのように授業を進めていけば良いかということについて意見を求められたことが、非常にやる気に繋がりました。WEB 上でのチュータリングシステムも、毎回の授業の感想を書くことで授業の進行度を振り返ることができたとし、自分自身の改善点も見直すことができたので、ただなんとなくチューター業務をこなすということがなく効果的だったと思います。まだチューター制度自体が始まったばかりで発展途上にあると思うので、先生とチューター、またチューター同士の連携をしっかりとっていくことが重要だと思いました。